

大塚修氏の学位請求論文「ペルシア語文化圏における普遍史書の研究：9-15世紀の歴史叙述における人類史認識」は、9-15世紀前半にアラビア語とペルシア語で記された「人類」史書を研究対象とし、これらの史書における「イラン／イランの地」を舞台にした「人類」史叙述の変容の過程を分析し、これらの文献の著者の歴史意識とその背景を解明しようとしたものである。

この論文のもっとも重要な学術的意義は、これまでの研究で等閑視されてきた「人類」史書の冒頭部分に着目し、その叙述をアラビア語・ペルシア語作品における歴史認識研究に活用した点にある。従来のアラブ史やイラン史研究者は、これらの史書のうちで著者が同時代について記述した部分だけを史実として重視し利用してきた。しかし、大塚氏は、各史書の冒頭に必ず置かれる「人類」の祖先についての記述の変遷を、時代順に系統的にたどってゆくことから、史書を記した人々の歴史意識の変化を浮き彫りにし、その背景と意味を説明することに成功した。大塚氏によると、当初はイスラーム教に特徴的な旧約的歴史観を背景に記されていた史書の冒頭部分に、10-11世紀頃からゾロアスター教の伝承で人類の祖とされるカユーマルスや古代ペルシアの四王朝についての叙述が意識的、整合的に組み込まれるようになった。大塚氏はこれを「イラン」概念の萌芽と評価する。さらに、14世紀のモンゴル時代になると、中央アジアのトルコ系の人々に由来するオグズ伝承という新たな要素が加わり、イランとトゥランを合わせて一つの世界とみる地理認識に基づく史書が記されるようになった。そして、15世紀前半のティムール朝時代になって、三つの異なる由来を持つ「人類」史解釈が一体となったペルシア語文化圏に特徴的な歴史認識とその記述スタイルが確立した。

本論文によって、これまで漠然としか把握されていなかった前近代のペルシア語文化圏における歴史認識の変遷が、きわめて明瞭に跡付けられるようになった。120点を超える原典史料を網羅的に参照し、これらを丹念に読みこんだ上での大塚氏の文献学的論証はきわめて説得的で、20世紀初め頃のヨーロッパの東洋学者の研究以来定説となっていたアラビア語・ペルシア語文献間の相互参照関係や各文献の史料的価値は、本論文によって相当程度覆された。今後、前近代ペルシア語史書を利用するにあたっては、本論文を参照することが必須となるだろう。

「普遍史」や「人類」という西洋近代に特徴的な術語を十分な検討と説明なしに使用している点、イランとトゥランの二項対立的な地理認識がなぜ生じたのかについて十分な説明がなされていない点など欠点がないわけではないが、これらは全体としての本論文の学術的価値を損なうものではない。よって、審査委員会は本論文を博士（文学）の学位に値するものと判断した。